

ほ う か ご  
放課後カフェ部!

い つ ご ち ょ う あ ま と う  
イケメン五つ子は超甘党

こがらし  
凧ちの・作

つなかわ・絵



アルファポリスきずな文庫

◆ はじめてのお客さん

◆ うわさの十倉兄弟

◆ 五つ子の秘密

◆ 大切な思い出～黒音side～

◆ カフェ部大作戦

◆ 十倉兄弟に直談判

◆ 甘い勧誘～黄金side～



◆ はじめてのお客さん

◆ うわさの十倉兄弟

◆ 五つ子の秘密

◆ 大切な思い出～黒音side～

◆ カフェ部大作戦

◆ 十倉兄弟に直談判

◆ 甘い勧誘～黄金side～



◆ 難しい交換条件

◆ ふたりきりの勉強会

◆ 十倉兄弟の過去～白斗side～

◆ テストの打ち上げパーティー

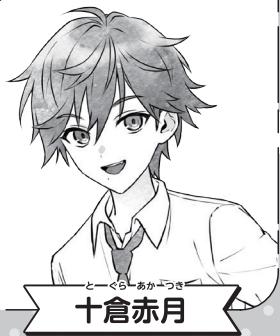
◆ トップアイドルの苦悩～赤月side～

◆ 十倉邸にお泊まり

◆ 閑じてもつていた心～青葉side～

◆ ついにオープン!?

とうじょうじんぶつしょうかい  
登場人物紹介



十倉赤月

アイドルグループsweet  
colorのメンバー。ビジュアルと歌唱力ナンバーワン！



十倉青葉

とある事情で学校をずっと休んでいる。正体は人気ゲーム実況者。



十倉白斗

成績優秀なさわやかイケメン。咲良のクラスの学級委員をつとめている。



十倉黄金

SNSや雑誌で活躍するインフルエンサー。おしゃれでかわいい男の子。



草ノ瀬一羽

咲良のクラスメイト。いつも明るくて頼りになる女の子。黒音推し。



十倉黒音

学校で大人気の五つ子。クールな一匹オオカミ。兄弟を仲直りさせるためにカフェ部を作ろうとしている。



甘井咲良

お菓子作りが好きな中学1年生。手作りのお菓子がきっかけで、あこがれの黒音とカフェ部を作ることになる。

## はじめてのお客さん

きやく

「うん、いい感じ」

オープnを開けた瞬間、温かい空氣とともにバターの甘い香りがただよう。

今まで作ってきたなかで一番と言えるぐらい、きれいに焼き上がったマフイン。

天板にのつたそれを、調理台の上に置く。

「おお、上手にできてるじゃないか。形がきれいなものを店に出そう」

そう言ったパパが私の頭を優しくなでる。

「うん！」

大好きなパパに褒められたのが嬉しくて、大きな声で返事をする。

すぐにパパに言われた通り、次の作業に取りかかつた。

私の両親は、自宅の隣でカフェ《あまい部屋》を経営していて、私はよくお店の手伝いをしている。

注文を取つたり、レジの対応をしたり。

コーヒー や 焼き菓子 の香りに包まれるこの穏やかな空間で過ごすのは、私の大好きな時間だ。

そして、今日はこのカフェで、私の夢が一つ叶う特別な日。

パパとママの手伝いをしていくなかで、私もスイーツを作るのが好きになつた。自然と、いつか《あまい部屋》に私の作つたスイーツも置いてもらいたいと思いながら、今日まで、私史上最高においしいマフィンを作れるようにならなければいけない。それが今日、ついに現実になる。

数量限定で、お店のサービスとして私の作つたマフィンを提供できるのだ。

家族や友達以外に自分の作ったものを食べてもらえる日がくるなんて。喜びで喜びでにやけそうになる口元を何度もキュッと結びながら、マフィンの準備と並行して、パパとママとオープンの準備をはじめた。

カラントローン。

# 「いらっしゃいませーーー！」

オープンから十分ほどが経つて、最初のお客さんが来店した。  
わたし 同年代くらいの男の子だ。

「お好きな席へどうぞ」

彼は、カウンターにいたママに案内されると、ペコっと会釈して一番奥のテーブル席へと進む。遠目に見てもとつてもスタイルがいいのがわかった。

急いでお冷を用意して、彼の席へと向かう。

「ご注文がお決まりになりましたら、お声がけください」

お冷を置きながらそう言うと、

「アイスカフェラテ、ありますか？」

とお客様がこちらに顔を向けて聞いてきた。

うわあ……きれいな人。

さらさらの黒髪。切れ長の目に前髪がわずかにかかつていて、それがより大人っぽさを感じさせる。スッと通った鼻筋に薄い唇と、シャープな輪郭。

男の人を見てきれいだと思つたのは生まれてはじめて。

「……あの」

「はっ！ すみません！ アイスカフェラテですね。かしこまりました！」

危ない危ない、あまりの整つた顔に思わず見惚れてしまつた。仕事中なんだから、集中しなきや！

カウンターに戻ろうと振り返ると、ママが口パクで私になにかを訴えていた。

あれは……

あ、そうか！ マフィン！

あんに楽しみにしていたのに忘れるなんて、私つてば！

再び、お客様のほうに顔を向ける。

「お客様、本日、数量限定でチョコチップマフィンをサービスしているんですが、いか

がでしょうか？」

緊張しながらたずねると、お客様がわざかに目を見開く。

「マフィン……いいんですか？」

「はい！」

「じゃあ、お願ねがいします」

「かしこまりました！ 少々お待ちください」

やつた！ 私のマフィンを食べてくれるはじめてのお客さんだ！

心のなかでガッツポーズをしながら、チラッと彼に目をやると、トートバッグからタブレットとタッチペンを出していた。

学生さんっぽいし、勉強かな？ えらいな……私は来週、中学の入学式だけ、宿題がないのをいいことに全然勉強なんてしてないよ。

スマートで素敵の人だな、と思いつながら、オーダーされたメニューの用意を急いだ。

最初のお客さんが来店してから二時間ほどが経つたころ。  
店内は、数組のお客さんで賑わっていた。  
よく来てくれる常連の老夫婦や、パソコンで作業しているスーツ姿の男性に、大学生ぐらゐの女の子ふたり組。

カウンターから、お客様たちのリラックスした雰囲気を眺めて心が温かくなる。  
『食べてくれる人のことを考かんがえながら作るのよ』

昔、はじめてママとスイーツ作りをしたときに教えてもらつた言葉が脳裏で響く。  
料理は真心が大事。

私が作ったマフィンを口に運びながら、会話を楽しんでいる老夫婦や女の子たちを見てホツとする。いざ、誰かに食べてもらえるその瞬間がくるとみんなのお口に合うか不安だつたから。

私の気持ちがちゃんと伝わった気がして、自然と顔がほころんでいると。

「お会計、お願いします」  
男の人の声がして振り返ると、最初に来店したお客様が立つていた。

「はいっ」

あらためて見ても、やっぱり俳優やアイドルみたいに顔が整つていて、目の前にいると少し緊張してしまう。

「お会計は三百五十円です」

「……マフィン」

「へつ……」

突然、財布を開く手を止めたお客様が、低いトーンでつぶやいた。顔を上げると、バチッと視線が絡んだ。

「あの人、今、マフィンって言つたよね？　おいしくなかつたとかクレームだつたらどうしよう！」

「あのマフィンを作つたのは、向こうにいる人？」

「え……」

お客様さんは、カウンターのうしろの厨房にいるパパに視線を向けながらそう言う。ちよつぴりひるんでしまうけど、ここは正直に……

「マフィンは私が作りました。今日ははじめてお店に置いてもらえる」とになつて……

「きみが作つたの？」

お客様さんは驚いたように前のめりでそう聞いてくる。

すぐくクールそうな印象だつたから、その仕草が意外で、ちよつと圧倒されてしまう。

「は、はいつ」

はつきり答えると、さらに彼の表情が明るくなる。

「……すごくおいしかつた」

え。

彼のほほえみがキラキラ輝いてて、息が止まつた。

心臓の鼓動が速く鳴り出して、顔もだんだん熱くなつていく。

いけないいけない。

トレイに置かれたお金を受け取り、緊張と嬉しさで震ふるえそうになる手でおつりを渡すと、

「ごちそうさまでした。また来ます」

お客様さんはそう言って、うしろを振り返つ



て出口へと向かつた。

「あ、ありがとうございました！」

彼の背中を見送りながら胸に手を置くと、まだ心臓がうるさい。

まさかあんな素敵な笑顔で『おいしかった』つて言つてもらえるなんて。

私のスイーツをはじめて食べて嬉しい感想を伝えてくれたお客様第一号。

今日のこと、彼のことも、私は絶対に忘れないだろう。

また……会いたいな。

## うわさの十倉兄弟

ふわりと吹く風が桜の花びらを揺らすと、わずかに肌寒さを感じる四月上旬。

新しい制服に袖を通した今日は、愛ノ花学園の入学式。

ダークグレーのセーラー服に、淡いピンクのスカーフ。

このやわらかくてかわいい色味の制服が昔から憧れだつた。

制服を身にまとると、自然と背筋が伸びる。

少しは中学生らしく見えているかな。

去年建て替えを終えたばかりの校舎はピカピカで、体育館の舞台で話をしている校長先生も優しそう。

学校に着くまではちょっと緊張していたけど、だんだん落ち着いて、期待に胸をふくらませていると。

「続きまして、新入生代表挨拶。十倉田斗くん」

そんなアナウンスが体育館に響いた。

新入生代表つて、学年で一番成績が優秀な子がするんだよね。

一体どんな子なんだろう、と舞台に注目してたら、男の子が舞台上に上がった。

その瞬間、周りが一気にざわつきはじめる。

特に……女の子たちが。

「春の息吹が感じられる今日、私たちは——」

温かみを込めて流ちように話す彼——十倉白斗くん。

彼の整った顔つきに私も引き込まれた。

こういう代表挨拶つて、いかにもまじめそうな子がやるんだと勝手に思っていたから驚いた。

色素の薄いミルクティーベージュの髪と、同じ色をした瞳。

小さな顔に長い脚。抜群にスタイルがいい。十倉くんは、テレビで見るアイドルみたいにかつこよくて、女の子たちがざわつくのも無理はない。

かつこいいと言えば……

ふと、数日前の春休みにお店に来てくれた男の子のことを思い出す。彼の笑顔を思い出すと、いまだに胸がキュンとしてしまう。

大人っぽかつたから同い年ではないかもしれないけど、もし同じ学校で再会できたら素敵だなあ、なんて思う。いや、また来るつて言つてくれてたし、お店でいつか会えるよね。そう自分に言い聞かせながら、十倉くんの挨拶に意識を集中させた。

入学式を終え、張り出されたクラス表を確認して、ワクワクしながら教室に入る。黒板に座席表が張り出されていて、自分の席に座ることができたけど……友達を作る前に、目の前の光景に固まってしまう。

教室の一番前の窓側の席にできている、ひときわ目立つ人だから。その真ん中には、今朝、新入生代表挨拶をしていた十倉白斗くんの姿が見えた。そう。私は彼と同じクラスらしい。

「ラッキーだよね、あの十倉くんと同じクラスなんて」



「へっ？」

突然、真うしろから声がして振り返ると、ハーフアップのよく似合う大人っぽい女の子が笑みを浮かべていた。

「あ、私、草ノ瀬一羽。よろしくね。甘井咲良ちやんだよね？ かわいい名前のおもてクラス表見て思つてたんだ」

「え、ありがとうございます！」く、草ノ瀬さん、よろしくお願ひします！」

「フフフツ、同じ年なのになんで敬語？ 一羽でいいよ。私も咲良つて呼びたいし。いいかな？」

「もちろん！ よろしく、一羽ちゃん！」

ついお店の手伝いのくせで初対面の人には敬語を使つてしまふけど、一羽ちゃんがあまりにも優しくて自然と緊張が解ける。

「それにしても、十倉兄弟が全員入学してくるなんてびっくりだよね」

「え、十倉兄弟？」

あの十倉白斗くんに兄弟がいるの？ と頭にはてなマークを浮かべていると、突然、廊下がざわつきはじめた。

「赤月くーん！」

「黄金くーん！」

男の子の名前を呼ぶ黄色い声が響いている。

「な、何事!?」

「え、もしかして咲良、十倉兄弟知らないの？」

まさかつて表情でこちらを見る一羽ちゃんに、苦笑いすることしかできないでいると、  
「うわあ……すごい人」

「じやなくてあつち！」

「一羽ちゃんは【見たほうが早い】と私の手を掴んで教室の外へと連れ出した。

「え、あれって……」

目に映る人物に息をのむ。

ほ、本物!?

女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>たちの熱<sup>あつ</sup>い視線<sup>しせん</sup>や歎声<sup>かんせい</sup>に、慣<sup>な</sup>れたよう<sup>て</sup>に手<sup>て</sup>を振<sup>ふ</sup>って愛嬌<sup>あいきょう</sup>を振りまいて<sup>い</sup>いるのは、  
大人気<sup>だいにんき</sup>アイドルグループ Sweetcolor のメンバーアカツキ<sup>あかつき</sup>の赤月くん！

赤月くんは、圧倒的<sup>あつとうてき</sup>なビジュアルとグループいちの歌唱力<sup>かかげりょく</sup>で同世代<sup>どうせい</sup>の女の子たちを虜<sup>とりこ</sup>にしている。

なんでそんな国民的<sup>こくみんてき</sup>アイドルが、こんな都心<sup>としん</sup>から離<sup>はな</sup>れた町<sup>まち</sup>の学校<sup>がっこう</sup>なんかにいるの!?  
そしてそんな輝<sup>かがや</sup>かしいオーラをまとう彼<sup>かれ</sup>から少し離<sup>はな</sup>れたところには、またも、まぶしい



オーラを放つ男の子。

子犬のようなクリクリした目に、ふわっと巻かれたやわらかそうな髪。  
入学早々、制服をおしゃれに着崩している彼は、女の子たちの髪型を褒めたりしている。  
そんな彼は、SNSで人気を獲得し、ファッショングラビティ雑誌に引っ張りだこのモデル、黄金くんだ。

最近はファッショントレンドの動画を投稿していて、チャンネル開設一ヶ月で、登録者数百万人を突破していた。

そんな今をときめくふたりが、どうして……

まさか、今一番注目されている芸能人やインフルエンサーと同じ学校に通うなんて……  
赤月くんと黄金くんが兄弟つてことは、界限では結構有名な話よ」

「そ、そうなの!?

横から一羽ちゃんが耳打ちしてくれた内容にびっくりする。  
有名人のふたりが実は兄弟つて……

全然知らなかつたよ。

「そ、そうなの!?

横から一羽ちゃんが耳打ちしてくれた内容にびっくりする。  
有名人のふたりが実は兄弟つて……

「そ、そうなの!?

「今日、新入生代表挨拶をした十倉白斗くんも、彼らの兄弟」

「え!? そうなの!?

「一羽ちゃん、詳しいんだね……」

「いや、知らない咲良のほうがまれだよ。十倉兄弟は五つ子なの」

「い、五つ子!?

「そう」

とうなずいて、一羽ちゃんが十倉兄弟のことをさらに詳しく教えてくれた。

十倉兄弟の残るふたりは、黒音くん、青葉くんという名前らしくて、青葉くんは小学校

のある時期から学校に通つていなかつた。そして……

「正直、私は黒王子派なの!」

いきなりそう言つて口元を緩める一羽ちゃん。

「く、黒王子?」

「黒王子の黒音くん。彼は、さわやかイケメン王子の白斗くんとは真逆なタイプなのよ」

「は、はあ」

今まで以上に熱弁する一羽ちゃんに圧倒される。

「クールで人とあんまり関わらない一匹オオカミタイプ。媚びない、群れないっていうのかな。そういうところがおとなの大人っぽくてちょーカッコよくて！ まあ、だから仲よくなるのは難しいと思うし、観賞用ね」

「ううん！ うわさよ、うわさ。十倉兄弟がうちに入学するかも、つて春休みの段階から広まっていたもん」

「ええーそうなんだ……全然知らなかつたよ……」

「まあ、ほんどの人はデマだと思つてたしね。私も今日まで信じてなかつたよ。十倉兄弟は超お金持ちの御曹司だし、こんなところに来るわけないつて。でもどうやら、十倉財閥はこの学校に多額の寄付をしているらしくて」

「お、御曹司……寄付……すごい情報量だ。

「とにかく、咲良も誰派か決めてみてよ！」 推しがいたほうが、学校生活も楽しくなるじゃん」

「お、推しつて……」

たしかに、十倉兄弟の話はすごいと思う。有名人とこれから同じ空間で過ごすことになるのも、ちょっとソワソワしちやう。でも……：

「うわさをすれば！」  
一羽ちゃんの声が耳に届いて、彼女の視線の先を辿つた。  
え……あれつて……  
赤月くんや黄金くんとは違つて、女の子たちに囲まれた廊下を無表情で歩く男の子の姿。

それを見て、トクンと胸が鳴つた。  
あの日見たのと同じ。

清潔感のある黒髪。きれいな鼻筋に薄い唇。それからシャープな輪郭。  
間違いない。彼は、私のマフィンを褒めてくれた——  
バチツ。

あまりにもじつと見ていたせいか、彼の素敵なアーモンドアイとしつかり視線が交わつ  
た。

ドクン、とさらにおおきく心臓が鳴ったときだつた。

歩いてくる彼が、私にペコッと会釈したのだ。

そして、すれ違いざま、ふつと口角を上げて、やわらかくほほえんだ。

あの日と……同じ笑顔だ。

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよ、なに今の！」今、黒音くん、咲良のこと見て笑つてなかつ  
た！？完全にこつち見てたよね！」

私もよりも大騒ぎな一羽ちゃんは、初対面だと、いうのに私の肩をバシバシ叩いて大興奮。

まさか、あのお客さんが、十倉兄弟のひとり、十倉黒音くんだなんて。

これから、同じ校舎で過ごせるんだ！

彼と知り合いでつてことは、なんとなく秘密にしたくて、一羽ちゃんには言わなかつた。  
いろんな衝撃を受けながら、中学校初日を終えた。

## 五つ子の秘密

翌日の放課後。

「じゃあね、咲良ちゃん！ クッキーありがとう！」

「甘井さんのお店にも絶対行く！」

席で日誌を記入していると、クラスメイトの女の子たちが私に手を振りながらそう声をかけてきた。

「こちらこそ、もらってくれてありがとうございます。いつかみんなで来てね！」

私も「またあした！」と手を振ると、もう教室にはほとんど人がいなくなっていた。クッキー、喜んでもらえてよかつた。

きのうの夜、クラスの女の子たちにあげようと思つて準備していたクッキー。一羽ちゃんにも帰り際に渡したかつたんだけど、ピアノのレッスンがあるつて急いで教室を出でていったので、渡しそびれてしまつた。

一羽ちゃんにはまた今度、好きな味を聞いて作ろう。

そういうえば……

今日、黒音くんのこと見てないな……

同じ学校だと会える機会が増えるつて思つたけど、この学校はひと学年、六クラスもあるし、それ違うのも難しいみたい。

つて……ほんと、気づけば黒音くんのことばっかり。一度話しただけなのに。

「お、ちゃんとやつてるな、甘井」

先生！

突然、ドアのほうから声がしたので顔を上げると、担任の岸本先生がひょこつと顔を出していた。

それからなぜか意味深に笑つて、私の机の隣にプリントの束を二つに分けて置いた。

「甘井、本当に申し訳ないんだけど、これ、三枚重ねてホチキスで止めてくれないか？」

このあと予定があるなら無理にとは言わないんだけど……この資料、あした使うのが急きよ決まつてさー」

腕時計に目を向ける先生は、すごく忙しそうだつた。

「大丈夫ですよ！ やつておきます！」

「本當か！ 助かるよ。終わつたら職員室に持つてきてくれるか」

「分かりました！」

「よし。

頼んだ」

先生は早口でそう言つて、すぐに教室をあとにした。

「これで最後！ できた！」

最後の束を机に置いて、グーッと伸びをする。

なんだか、お店のオープン前にたくさんチラシやショップカードを作つたことを思い出す。

よし、これを先生に渡したあとは、帰つてお店のお手伝いだ！ と気合を入れて席を立つ。

カバンを肩にかけて、日誌とプリントの束を腕に抱える。

「うつ……」

これ……結構バランス保つのが難しいかも。  
新らしい教科書や資料が入つてゐるカバンが、思つたよりも重い。

「行くぞー！」

とさらりに気合を入れて、私は教室を出た。

えつと……職員室つてどこだつけ……たしか、一階……ここは二階……  
何度もカバンを肩にかけ直し、なんとか階段をゆつくり下りて、踊り場まであと一段と  
いうときだつた。

一番上のプリントがスーツと傾きだし、それを直そうと体勢を少し変えた瞬間、肩にかけていたカバンの重みで重心がずれ、そこからはあつという間だつた。  
幸い、私が転ぶことはなかつたけれど、日誌とプリントが盛大に床に散らばつてしまつた。

うう……最悪だ……

ちょっと泣きそうになりながらプリントを集めていると、背後から足音が聞こえた。  
どんくさいところを誰かに見られてしまう！ 急いで拾つていると、階段を駆け下りてくる音がした。

「それ、全部ひとりで持つのは無理でしょ」  
頭上から降ってきた聞き覚えのある声に顔を上げると、整った顔が私を見下ろしていた。

……嘘。

きのうぶりの黒音くんが、数枚プリントを持つて立っていた。

「あつ……」

黒音くんも私に気づいたように、目を見開く。

「あ、拾つてくれてありがとうございます！」 助かりました！

そう言ってプリントを受け取ろうと手を伸ばした瞬間、プリントがひょいっと上に持ち上げられた。

「え……」

「こつちは俺が持つから」

「あつ……」

黒音くんは私の腕のなかにあつたプリントも奪つた。

「そんな、悪いよ」

「マフィンのお礼」

続けて「これ、職員室でいいの？」と聞きながら、一階へと続く階段を下りていった。

「ありがとう、黒音くん！ ほんと助かりました！」  
一緒に職員室を出て、あらためてお礼を言う。

「いや……ていうか、俺の名前知つているんだ？」

黒音くんにそう聞かれて、「あつ」と口元に手を当てる。

「なれなれしくごめんなさい！みんながそう呼んでいたからつい……」

「いや、いいよ。五つ子なんて目立つしね」

そう話す黒音くんの目が、なんだか寂しそうに見えたのは気のせいだろうか。

「じや、またね」

黒音くんはくるつと背を向けて歩き出した。

そのうしろ姿を見て、私のマフィンを食べてほほえんでくれたのを思い出し、ふと、  
羽はちゃんと渡すはずだつたクッキーが頭に浮かんだ。

「あの！」

彼の背中に声をかけると、すぐに振り向いた。

「クッキー！ 食べませんか！」

「え……」

「あ、えっと、クラスの友達に渡つつもりだつたんですけど、タイミング逃してしまつた  
んです。黒音くん、この間、私の作ったマフィンをおいしかつたつて言つてくれたから、  
もしよかつたらと思つて。プリント、一緒に運んでくれたお礼です！」

緊張して早口になつてしまつたけど、話し終えてから、迷惑かも！ なんて考えがよぎ  
る。

「はつ、急にそんなこと言われても困りますよね！ その……」

「食べる」

「へ……」

「食べたい」

「きみの作るスイーツ。食べたい」

彼が笑顔でそう言つてくれたので、ホッと胸をなでおろす。  
よかつた……

私は、カバンからラッピングしたクッキーを取り出して、彼に差し出した。  
「お口にあれば、いいけど……」

「まだ時間大丈夫？」

「え……時間？」

「これ、一緒に食べようよ」

黒音くんに連れられてやつてきたのは、昇降口近くにあるフリースペース。  
丸テーブルとイスがカワエのよう並んで  
いて、隣には自販機が五台設置されている。

休憩はもちろん、お昼を食べたり勉強もで  
きる。ここちちかくに連れてきてやつたのは、昇  
降口近くにあるフリースペース。



きたりする場所だ。

「そういえば、名前聞いていなかつた」

「あ、えつと、一年一組の甘井咲良つて言います！」

「甘井……咲良……そのまんまだな」

「そのまんま……？」首を傾げると、黒音くんはほほえんで、自販機に向かつた。

「咲良はなに飲む？」

「えつ!?」

突然の名前呼びに戸惑いつつ彼を見ると、自販機のボタンを押して電子パネルにスマホをかざしていた。

ガタンっと落ちてきた飲み物を黒音くんが取り上げる。

……」「コアだ。

黒音くんつて、甘党なのかな……ってそうじやなくて！

「好きなの選んで」

「いや、大丈夫だよっ」

「いいから」

お礼がしたくてクッキーあげようつて思つたのに……

私がなにか言うまで動く気のなさそうな黒音くんに負けて、私は遠慮がちに、「アイスティーや」と伝えた。

先ほどと同じようにスマートに飲み物を買った黒音くんが、私にアイステイーを差し出す。

「ありがとう。いただきます」

両手でそれを受け取ると、黒音くんはイスを引いて、私に座るようにうながした。

することが全部、紳士すぎるよ。

「し、失礼します」

そう言ってイスに腰かけると、黒音くんも私の斜向かいに座る。

そして「いただきます」と言つて、ラッピングを解き、中から一枚クッキーを取り出し

た。

「お、桜だ」

黒音くんが薄い。ピンクの桜の形をしたクッキーを見つめ、一枚口に放り込むと、サクサクとわずかに音が聞こえてくる。

「いちご味か……うま……」

と黒音くんがかみしめるようにつぶやいたので、ホッと胸が温かくなる。

「よかつたあ……」

「やつぱり、すごいな……咲良の作るスイーツは」

そう言って、黒音くんは優しくほほえんだ。

## 大切で思い出の黒音sides

春休みのあの日。

ひつ越してきたばかりの場所で見つけた、こぢんまりしたカフェ。

そこでマフィンを食べて、昔の幸せだった記憶を思い出した。

今までの俺なら、手作りのクッキーなんて断つてさつさと帰るのに。

そもそも、誰かが落としたプリントを拾つても、半分持つなんてしない。

彼女……咲良と目が合つて、まるで体中に電流が走ったかのような衝撃だつた。

まさか、同じ学年の女の子だつたなんて。

咲良からクッキーの話をされたとき、自分でもびっくりするぐらい即答した。

また彼女の作るスイーツが食べたかった。

クッキーを食べると、マフィンのときの感動がよみがえつた。  
そして確信した。

咲良の作るスイーツには、食べた人の心を温かくする力がある、と。

「へー、あのカフエ、咲良の自宅とつながっているんだ」

「そう。物心ついたときからうちがカフェだったから、お客様さんはほとんど親戚みたいにな

感じて

そう話す咲良を、うらやましく感じた。

甘い香りに包まれながら、気心の知れたお客さんに囲まれ、家族でカフェを営んでいるなんて。

「あー、だから居心地よかつたのかな。アイスカフエラテも咲良の作ったマフィンももちろん最高にうまかったけど。すごく作業がはかどった」

「そう言ひば、黒音くん、集中してがんばつてはよ。

「そ、三日後は黒音くん集中してがんばっていたからね。私は、みんなふうに机に向かってコツコツ取りかかる人、尊敬するよ。

「そう？　スイーツ作りも集中力いるでしょ？」それに、あれ、勉強してたんじやない

かぞく  
以外  
ことはな  
したことのない秘密を、どうしてか笑良はな  
してしまう。

「イラストを描いてたんだ」

「イラスト？」

「趣味でね」

「え！」

咲良が目をキラキラさせながらこつちを見ている。

黒音くんのイラスト……！

まるで、見せてほしいと言わんばかりの無邪気な表情に、トクンと胸が鳴る。

「えつと……」

俺は、カバンの中から愛用しているタブレットを取り出して、イラストを保存しているファイルを開く。

「アラウド」

誰かにイラストを見せるなんて。  
じぶんじしん こうどう  
じぶん いちばんおどろいてる。

「うわ……。すついへ上手」

俺の描いたイラストを生き生きとした瞳で見つめる咲良。「こんなにうまいなんて、趣味の範囲を超えてるよ……」「いや……そんなことないけど……」

「声をあげる。

「このイラスト……とっても温かいね」

咲良が、あるひとつのイラストを見てつぶやいた。  
「もしかして、黒音くんと兄弟のみんな？」  
「……うん。ずっと昔の思い出」

あのころの記憶がゆっくりと思い出される。  
以前住んでいた家には、広い庭があつた。

その隅っこには、ガゼボという、アーチ型の屋根がついたテーブルベンチがあつた。白

を基調としていて、まるでおとぎ話から出てきたみたいな建物。  
まだ母さんが生きていたころ、俺たち五つ子はよくその場所で母さんの手作りしたスイーツを食べながらティータイムを楽しんでいた。

あのころが……一番幸せだった。  
「俺たちがまだ小学校に上がる前の話」白斗が、いつか母さんのスイーツを出すカフエをみんなで開きたいって言い出したんだ。それから母さんが亡くなつて、その願いは叶わなくなつたんだけど……今は兄弟みんなバラバラだし、咲良んちがカフエしているのを、うらやましいって思つてさ……」

「そうだつたんだ。……今はバラバラつて？」

「……俺たち、実は仲が悪いんだよね。昔、いろいろあつてさ」

「そつか……」

静かに俺の話を聞いていた咲良にふと視線を向けて、話しそぎたと我に返る。

「あ、ごめん。こんな話……不思議だな。咲良の作るスイーツを食べたらなつかしい気持ちになつてペラペラと……」

「……叶えようよ！」

まつすぐな目で声を発した咲良に、言葉が詰まる。

今、なんて言つた？ 叶える？

「どうすればいいか全然わかんないけど、十倉兄弟の夢、一緒に叶えよう！」

「叶えるって……あいつらはもう、あのころのことなんて忘れているとと思うし……」「みんなの気持ちじやなくて、まずは黒音くんの気持ちだよ！ 強い気持ちが原動力になるんだから！」

咲良の芯のある声にハツとする。

「俺の気持ち……俺は……」

こんなこと、はじめて口にする。

心の奥底で、わずかに灯つていた俺の夢。

「みんなと、カフェを開きたい」

「うんっ！」

俺の言葉を聞いて、咲良がにつこりと笑う。

「でも、どうするの？」

「それを今から一緒に考えるの！」

こうして、俺と咲良の作戦会議がはじまつた。



# カフェ部大作戦

力ランコローン——  
小さなドアベルが鳴り、家のカフェに入ると、コーヒーのいい香りが鼻をくすぐる。

「おかえり、咲良」

「咲良ちやん、おかえり。お、さつそくボーアフレンドかね」

レジに立っていたママのすぐ隣には、カウンター席に座っている常連の賢二さん。

「もう、賢二さん、違うよ！　ごめんね、黒音くん」

黒音くんに気づくなり、賢二さんが冷やかすように言うので、はつきり否定してママを見た。

「ママ、今から黒音くんと大事な話があるから、向こうのテーブル借りるね。お客様増えてきたらお店手伝うから！」

黒音くんに先に席へ座るようにうながしてから、レジのうしろから自分の部屋へと向

かつた。

「おまたせ！」

部屋からあるものを持つてお店に戻った私は、黒音くんの待つている席に座る。

テーブルには、ママが用意してくれたらしいカフェラテがふたつ置かれていた。

カフェラテをひと口飲んだ黒音くんが、わずかにホッとしたような表情をする。

一羽ちゃんは、黒音くんのことをクールで一匹オオカミだつて言つていたけれど、私にはそんなふうには見えない。

「……ノート？」

黒音くんが、私が手に持つているものに気づいた。

「そう！　かわいすぎてずっと使えなかつたノート。ついにこれを使うときが来たよ！」

パフェやケーキ、たくさんスイーツが描かれたノート。

その表紙に、マジックペンでていねいに文字を書く。

《カフェ部計画ノート♡》

「……カフェ部」

私の字を見て、黒音くんがつぶやく。

「外でちゃんとカフェを経営するのは、未成年の私たちじや、あまり現実的じやないかと思つて。それなら、学校にカフェ部を作つて、生徒のためにもなるような活動をするのはどうかな？」

「部活か……その発想はなかつた。うん。すくいいとと思う」

「ねつ！　うまくいつたら、学校の外でも休日限定でカフェをオープンなんてこともできそうだし！」

「なるほど……」

黒音くんと話しながら、どんどんアイデアが浮かんできてワクワクする。

カフェ部。もしそれが現実になつたら最高だつて思う。

うちのカフェのような、お客様さんがホッと一息つける場所が学校にもあつたら、学校に

来るのがもつと楽しくなるに決まつていて。  
「でも……新しい部活を立ち上げるには、理事長からの許可が必要だよね。条件が結構あつた気がするし」  
黒音くんの冷静で現実的な意見を聞いて、ハツとする。  
「……だよね。でも、黒音くんの願いなら、理事長も聞いてくれるんじやないかな」  
私は、黒音くんが御曹司で、十倉財閥が学校に多額の寄付をしているといううわさを思い出してそう言う。

「んくどうだらう」

「とにかく！　聞くだけ聞いてみよう！　あしたさつそく理事長に直談判しに行こう！」  
私は、ノートにササッと書き込んだ。

《やるべきこと》

①理事長からカフェ部を作る許可をもらう

翌日のお休み。



立ち読みサンプル  
はここまで

「うんつ、もちろんっ！」  
私と黒音くんは、重厚感のあるドアの前に立っていた。

「咲良……本当に理事長に話すの？」

「と答えるけど、実際、私もかなり緊張している。

でも、ここでなにも行動しないでいたら、もつたいないと思うから。

私はゴクツと喉を鳴らして、ドアをノックした。

コンコンツと低めの音が響いて、中から「はい」と落ち着いた声がした。

「し、失礼します！」

私の代わりにドアを開けてくれたのは黒音くん。

ふたりで中に入ると、デスクのうしろにある窓ガラスの前に立っていた理事長がこちらを向いた。

「おお、誰かと思えば、黒音くんじやないか。お隣は——」

「えつと、一年の甘井咲良と申します！ 新学期がはじまつたばかりのお忙しいところすみません。実は、この愛ノ花学園に新しく『カフェ部』を作りたいと考えていまして

理事長は少しの間を置いて、ゆっくりとこちらへ歩み寄る。

「カフェ部……とは具体的に、どんな活動をするのかね。黒音くん」

「生徒たちの憩いの場が作れたらなと。咲良……甘井さんの家がカフェを経営しているのですが、居心地がよくて、素敵な場所なんです。この学校にもそんな場所があつたら、生徒たちに寄り添う居場所ができるんじやないかって……」

「なるほど。たしかに、もしそんな場所が実現できたら素敵だ」

黒音くんの説明を聞いてニコツとほほえんだ理事長を見て、ホツとする。

「……それじやあ！」

「黒音くん。十倉財閥からの寄付には本当に感謝しているよ。キミたち兄弟の要望にはでかけるだけ応えたい。しかし、さすがにいくらなんでもキミひとりだけの意見で部活を新しく作るのは……ね」

「ひとりだけって……一応、私もいるんだけどな……」

「それって、ほかの兄弟が部員になるなら、協力してくれるつてことですか？」